

科学と社会委員会 科学と社会企画分科会（第24期・第3回）議事要旨

1 日 時 令和元2月3日（水） 10:00～12:00

2 場 所 日本学術会議5階 5-C（1）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、高山 弘太郎（連携会員・副委員長）
藤原 聖子（第一部会員・幹事）、川口 慎介（連携会員・幹事）、
遠藤 薫（第一部会員）、高瀬 堅吉（連携会員）、沖 大幹（連携会員）
（欠席） 西嶋 一欽（連携会員）
（事務局） 高橋参事官、酒井参事官補佐、鳥生審議専門職

4 議事要旨

（1）本分科会及び科学と社会委のこれまでの審議について

●渡辺委員長より資料1-1及び資料1-2により説明があった。

（2）議題1～3について、自由に意見交換があった。主な内容は以下のとおり。

社会における学術について

- ・学術に対して社会が期待しなくなっているのを感じる。学術が大事だからサポートして欲しいと言っても通じない。夢を語り、学術がこんなことを明らかにするし、課題を克服するし、明るい未来を作れるということをきちんと示せば、サポートに同意してくれるのではないかと。アピールしていくことが重要。
- ・その観点で学術会議は展望2020を出そうとしている。2030、2050年に学術の観点から考える未来を示そうとしている。
- ・クラウドファンディング等で個別の分野には支援が集まっている。何を目指しているのか一般的にわかるようにするのが重要。
- ・具体的なものには社会も興味を示す。展望2020にも具体的なものを入れることが重要。
- ・個別の政策を並べても全体では混沌としてしまい、一般の人はそれに苛立っている。故に、山師的なものではなく、未来を誠実に語りつつ、人の心に刺さるストーリーが大事である。どんな未来なら受け入れられるのかを考え、そこに学問がどのように貢献できるのかを考える必要がある。
- ・学術が社会に示すところの「社会」とは何かというとき、やはり産業なのかなと思う。産業界が注目していることを先ずやった方が良いのではないかと。
- ・今の産業界に、芸術・感性といった観点が無いのがいけないのではないかと。世界の産業ではデザインから入らなければモノが売れないというのが常識だが、日本ではそうではない。
- ・現在は一般市民の情報やデータに関するリテラシー欠如がありながら情報過多である。市民の情報リテラシーを上手につくってあげる必要がある。情報がたくさんあるものが必ずしも正しいとは限らず、学術が正しく理解される意味でもこれは重要。
- ・若者や女性が社会の端っこに押しやられている現状がある。
- ・全世代が学術を使って、社会を活性化するためのチャンスが皆に与えられることが重要。そのための大学院等も作られてるが、それらの評価の尺度が大きい会社に入るとか、古いままではいけない。どれくらい起業しているかなど、新しい価値を提案するものでなければならない。

- ・我々の社会認識が間違っただまま固定化しているのが問題。それを解くのが学術の仕事であるが、社会の認識を要素還元的に行うのは間違いなのではないか。複雑な事象を複雑なまま伝えることも有効である。問題の本質にはストーリーが必要であり、そのストーリー無くして学術への期待を社会に聞くのは誤りではないか。
- ・研究力に関して、大学では学生時代にやったことを継続してやっている。自分の専門分野だけに固執するのはどうかと思う。新しいチャレンジを大学の教員もやるべきではないか。こういう研究が必要だと思えば、その時その時で必要と思う研究をすべきではないか。
- ・研究力の一番の指標は研究者人数だと思う。構造として、人口の何パーセントが研究者になるべきか、その基盤としてどれくらいが高等教育に進学すべきか、適正規模を考えるべきではないか。
- ・江戸時代に遡れば、学校に行けない人たちも知識・技術を得て成功してきた歴史がある。そこに知識・技術に対するリスペクトがあったと思う。個別の分野ではなく、一般教養のような研究マインドの涵養が必要ではないか。

学術会議の役割について

- ・シンポジウムも大事だが、理解してもらうためには、学術の側から説明しに行く必要があるのではないか。成果が出るまで責任を取るべきではないかと思う。産業をきっかけにすればこれがやりやすい。
- ・ソサイエティ 5.0 のビジョンに社会的な面が表層的にしか出てこない。その中身を我々学術が肉付けして、それで国際的提案力をつけるのが良いのではないか。世界的な流れでは、ソサイエティに人文社会を絡めるのがトレンドである。これは世界に発信するいい機会であり、人文社会の話を取り込んだ方がより良い産業が出来ますよ、ということを示せる。
- ・市民のリテラシーにはそんなに期待できないのではないか。我々も専門外には無知である。自分で考えて全てを正しく判断するのは無理ではないか。社会が迷っていることに対して、学術会議が一定の意見を示し、信頼を得ることには意味があるのではないか。
- ・社会から求められていることに対し、学術会議がお墨付きを与えるのが重要と考える。その考えから 24 期は様々なところと対話をしており、具体的には審議依頼を積極的に受けている。このように学術会議が外部から求められる部分を作っていく、それに誠実に答えて信頼されるというプロセスは必要だろう。

(3) 政府との関係及び学術会議の対応について

- 渡辺委員長より、資料 3-1 により、「日本学術会議のさらなる活性化に向けて」（内閣府平成 27 年 3 月 20 日）について説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。

本分科会の今後の活動について

- ・「日本学術会議のさらなる活性化に向けて」に対する学術会議の対応について、25 期に考えてもらうために、報告か提言にして残すことが望ましいと思う。
- ・政府が学術を大事にしてくれていると思えば社会もそう見てくれると思う。だがその際、独立性を維持した学術の存在が信頼性を高めるということが重要。
- ・そのような提言は展望 2020 がやるのではないか。
- ・展望は具体的な提言にはならないと思う。政府に対する要望として本分科会でまとめるのはどうか。今期に変えることはできなくても、次期に残すことはできる。
- ・政府から宿題をもらって、それを返すことで価値を持つのが良い。
- ・本分科会としては、展望 2020 をメタ的に見ていくのはどうか。展望は展望で、足り

ない部分を本分科会でまとめる。こちらは政府との対話を前提とするのも一つのやり方である。

- ・連携会員については、予算に見合った規模でやることも必要である。
- ・現在の予算規模であれば、分野別委員会も課題に合わせて分科会を立ち上げないと回らないと思う。
- ・世の中で結局何が信じられているかとなると、やはりテレビだと思う。しかしテレビもミスリードすることもあるので、人の気持ちを考えながら事実を示せる学術会議にならないといけない。

特に SDGs に関して

- ・SDGs に関しては、政府のためというより世界のため、そしてそれが日本のためになるというスタンスが望ましい。
- ・SDGs については米国が積極的でないのは気になるが、海外を見習うのではなく、日本だからこそできる提言を目指したい。
- ・SDGs に対する貢献だけでなく、それ以上のことができるということを強調できるようにできればいい。
- ・政府の「日本学術会議のさらなる活性化に向けて」を受けて返す形の提言としたい。その際、SDGs の観点も入れていくこととする。

- 渡辺委員長と藤原幹事で提言のたたき台を作成し、各委員にはメールでご議論頂くこととなった。

(4) 外国人アドバイザー

- 渡辺委員長より、資料4により説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。
 - ・外国人アドバイザーに展望2020を読んでもらうのが良いのではないか。
 - ・学長クラスの方もよいが、展望を英語にする際にフットワーク軽く動けるような方もよい。
 - ・日本語のわかる方がよい。

以 上